

# 日本計量生物学会ニュースレター第92号

2006年11月30日発行

## 目次

巻頭言「理工系離れ・学生の心理」  
学会活動の活性化と国際化に向けて  
2007 - 08 年度評議員選挙の結果報告  
日本計量生物学会 2007 年第 1 回評議員会議事録  
2006 年第 3 回対面理事会議事録  
日本計量生物学会特別講演会のお知らせ  
2007 年の計量生物シンポジウムに関するお知らせ  
2006 年度統計関連学会連合大会企画セッション「生物統計学の社会的貢献 - 四半世紀の経験と今後の展望」報告  
2006 年度統計関連学会連合大会チュートリアルセッション「Adaptive and flexible designs in clinical trials」報告  
2006 年度統計関連学会連合大会コンペティション講演受賞者の弁  
2006 年度 統計関連学会連合大会報告  
学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い  
会員からのお知らせ：科研費シンポジウム「Adaptive Design を考える」  
編集後記

## 巻頭言

### 「理工系離れ・学生の心理」

椿 美智子(電気通信大学システム工学科)

前回 91 号の鎌倉先生の巻頭言「理工系離れ・統計科学の先細りをどうする」が、あまりにも身近であったので、若い学生さんに接している日々の体験を書いてみようと思います。

理工系離れがどうして起こってしまっているのだろうか？「なぜ？」と疑問に思う気持ちは、きっと今も変わらず子供の中にあるのだと思います。周りの子供たちを見ていればよくわかります。それが、大学の選択では、なぜ理工系を選ぶ学生の割合が減ってしまっているのだろうか？

1つには、数学等の教育の仕方に変化が現れているからのような気がします。小学校、中学校、高等学校で教える内容が変わってきています。従って、数学を理解したとしても、予測や見通すことはできたとしても、それを使って何かをすることが出来る程理解できている学生さんの割合が減ってきています。もちろん、よく出来る学生さんもいます。しかし、割合は時系列的に明らかに減ってきています。ただ、その数学を将来必要とする職業の割合が、理解できている学生さんと同じであれば心配はいらないとも考えられます。しかし、恐らくそうではないから、皆さんが危惧しているのだと思います。従って、数学の教え方に工夫が必要とされています。

2つ目には、いつの時代も本当はそうなのでしょうが、当然のことながら、出世したいと学生さんたちは望んでいるということがやはりあるように思います。そして、時代の先端のところまで生きて行きたいと望んでいると思います。文系の学費より多くの費用がかかり、授業出席のため多くの時間を大学で過ごし、レポートも沢山書き、卒業していくのです。堅実な理工系ということだけではない何かを求めているように思います。

先細りということから言うと、理工系の学生さんが社会の中でどのように活躍して行ったらよいのか道筋が分からないという要因もあると思います。本人たちは専門分野だけ

ではなく、幅広い教養を身につけようとしているように思われます。考えていないわけでも、勉強をしていないわけでも、本を読んでいないわけでもないように見受けられます。それなのにもかかわらず、結果としてはなぜか近視眼的になっているのは不思議です。ただ、近い将来の結果がでないと思不安なのだと思います。

そして、きっと、1人1人の先生方は、非常に熱心に、卒論生を育て、修論生を育て、博論生を指導し続けていらっしゃるのだと思います。それなのに、なぜ、先細りを心配しなければならないのでしょうか？世の中が、何となく1人1人の努力の積み重ね以上に、組織的な大きなアウトプットを望むようになってきているのだと思います。そこに、若い学生さんたちは光を感じる。何となく、そちらの方へ行けば、明るそうだ。

統計学全体、特に医学統計学・計量生物学は、ニーズが先細りということは無い。「忘れられた科学 数学」という報告書の中にも、統計的方法に期待が寄せられている課題が数多く載せられている。その多くは、すでに各先生方によって研究されている課題でもあるので、やはり、それを組織的に社会に示していく必要があるのだと思います。学会としては、どのような方法をとればそれができるのでしょうか？研究会を立ち上げ、そのアウトプットを、広く応用分野の方々にも、より一般の方々にも、これからの若い方々にも、示していく必要もあるように思います。そのアウトプットによって、多くの人々がその光の方へ心を動かして向かって下さればと思います。

## 学会活動の活性化と国際化に向けて

会長 丹後俊郎

### 国内学会活動の活性化

学会活動の活性化に向けた取り組みは、今期理事会に託された前期柳川会長からの大きな宿題の1つである。国内での学会活動に関しては、今年の統計関連学会連合大会での本学会創立25周年記念企画セッション「生物統計学の社会的貢献：四半世紀の経験と今後の展望」を初め、企画担当理事の懸命なご尽力により、多彩なシンポジウムや計量生物セミナー、チュートリアルセミナーが開催され、会員をはじめ非会員の参加も伸びてきている。これが刺激となって計量生物学の研究領域の拡大・発展につなげていければと思う。

### IBC201X(X>0)誘致へ向けての活動

一方、国際化に向けての取り組みとして、今期に IBC2010 に立候補するという理事会決定を受け、モンリオール開催の IBC2006 での Conference Advisory Committee におけるプレゼンテーションの準備を進め、佐藤俊哉国際担当理事に神戸開催のプレゼンをしていただいた。このときには私のほか山岡庶務担当理事、柳川監事が同席したが、佐藤氏のプレゼンはなかなか見事であったというのが同席した3名の一致した意見であった。今回はブラジルも立候補し、両提案に対していろいろ意見が出された。しかし、残念ながら投票結果として「どちらの提案も魅力的であるが、主にコストの理由からブラジルに決定した」という報告を受けることになった。その後、IBS の Tom Louis 会長や Conference Advisory Committee 委員長らと話す機会があり、ブラジル決定の大きな理由はブラジルが南アメリカの region としての

活動を活発に行い、その活動の一環として今回の立候補に  
 いったということが評価されたのではないかと理解するに至  
 った。残念ながら日本計量生物学会はアジア地域の中で  
 は IBS の会員数が最大であるにも拘らず、決してアジアの中  
 でリーダー的存在とはいえない。今のルールでいくと日本  
 は 2016 年の IBC まで立候補できないのだが、幸い、佐藤理  
 事のご尽力により、IBS の日本開催に関しては一番早ければ  
 2012 年に日本で IBC を開催できる可能性がでてきた。その  
 ためには IBS センtralオフィスへの協力や、アジア地域で  
 の計量生物を振興する活動などが必要となってくる。IBS の  
 活動の活性化という面ではアジア地域の活動をもっと活性化  
 し、欧米諸国がアジアに目を向けるようにすることも今後の学  
 会活動の国際化を考えていく上で重要なポイントなのである。  
 また、これは日本計量生物学会の今後の更なる発展にもつ  
 ながることである。

### 2007 年の Far East Asia Regional Conference (仮称) の 開催

アジア地域での IBS 活動を活性化すること、そのためには  
 まず、もう少し身近な極東アジアでの IBS 活動の活性化を図  
 ることから始めるのが実施可能性から考えて適当であろう。  
 現在、その足がかりとして 2007 年の Far East Asia Regional  
 Conference の開催を目指し、韓国 Biometric Society の  
 Professor Tarim Lee 会長との調整を行っている。

### IBS センtralオフィスへの協力

もう一つの重要なポイントである IBS センtralオフィスへの  
 協力に関しては、現在、日本からは佐藤俊哉国際担当理事  
 が IBS Council Member として活躍しているが、日本の IBS  
 会員数を考えても少なすぎる人数なのである。日本より会  
 員数がやや少ないオーストラリア、スペイン、オーストリア、ス  
 イスでも 2~3 名おり、会員数が 30 名ほど多いイギリスは 6 名  
 の Council Member を送り出し発言力を高めている。少なく  
 とも 2008 年の IBS Council Member の投票では日本の候補  
 者を複数名出し、IBS 会員を増やすことを目標に努力してい  
 きたい。IBS 会員の諸氏の投票へのご協力をぜひお願いし  
 たい。

## 2007 - 08 年度評議員選挙の結果報告

選挙管理委員長 岩崎 学

過日実施されました日本計量生物学会 2007-08 年度評議員  
 選挙の結果、以下の方々当選されましたのでご報告しま  
 す(地区別:氏名の五十音順)。2年間よろしく申し上げます。

東日本	西日本
1. 岩崎 学	和泉志津恵
2. 大橋靖雄	上坂浩之
3. 岸野洋久	大瀧 慈
4. 越水 孝	大森 崇
5. 酒井弘憲	越智義道
6. 菅波秀規	折笠秀樹
7. 高木廣文	鍵村達夫
8. 丹後俊郎	嘉田晃子
9. 椿 広計	後藤昌司
10. 西川正子	佐藤俊哉
11. 浜田知久馬	柴田義貞
12. 林 邦彦	寒水孝司
13. 藤田利治	手良向聡
14. 松山 裕	濱崎俊光
15. 松浦正明	藤井良直

16.	三中信宏	本多正幸
17.	三輪哲久	松井茂之
18.	山岡和枝	森川敏彦
19.	山口拓洋	森田智視
20.	吉村 功	柳川 堯

## 日本計量生物学会 2007 年第 1 回評議員会議 事録

山岡和枝(庶務担当理事)

日 時:2006 年 11 月 11 日(土)15:00 - 16:30

場 所:東京理科大学理窓会館 3F 第一会議室

出席者:

(東日本)岩崎 学, 岸野洋久, 酒井弘憲, 菅波秀規,  
 丹後俊郎, 西川正子, 浜田知久馬, 林 邦彦,  
 松浦正明, 松山 裕, 三中信宏, 山岡和枝,  
 山口拓洋.

(西日本)和泉志津恵, 折笠秀樹, 鍵村達夫, 嘉田晃子,  
 佐藤俊哉, 寒水孝司, 手良向聡, 森田智視.

以上 21 名(委任状 17 通)

### 配布資料

- (1) 2007-2008 年度日本計量生物学会評議員名簿
- (2) 日本計量生物学会会則ならびに細則(抜粋)

開会に先立ち、出席者 21 名および委任状 17 通により、会  
 則 32 条(委任状を含め評議員現在数の 2 分の 1 以上)の要  
 件を満たし評議員会が成立することが確認された。

会則 31 条に従い、出席評議員の互選により丹後  
 2005-2006 会長が議長として推薦され、以下の議事が進行し  
 た。

### 議事

#### 1. 2007-2008 年度会長候補者の選出

会長候補者選出に先立ち、会則 31 条に従い具体的な選  
 出の手順が議論されたが、学会での事業の継続性を考慮し  
 て引き続き現会長に 2 期目を務めてもらうという意見が圧倒  
 的多数であり、丹後俊郎現会長が 2007-2008 年度会長候補  
 者に選出された。

#### 2. 理事の選出

細則第 3 条 (3) では 10 名の理事を評議員の中から選出  
 すると定められている。同条同項の「IBS の council member  
 は理事に就任する」という規定により佐藤俊哉氏がまず選出  
 された。残りの理事 9 名の選出に先立ち選出方法が議論さ  
 れたが、前回の選出方法に準じて行うことが合意され、それ  
 に則り以下の 9 名の理事が選出された。

岩崎 学, 上坂浩之, 大橋靖雄, 酒井弘憲, 浜田知久馬,  
 松山 裕, 松浦正明, 森川敏彦, 山岡和枝 (五十音順)

理事の定員は 15 名で、残りの 5 名の理事は会長が正会員  
 の中から指名する(細則第 3 条 (3) の規定)、理事の役割は  
 全理事確定後に決めることが評議員会で合意された。

#### 3. 監事の選出

細則第 3 条 (4) の規定に基づき監事の選出方法が議論さ  
 れ、合意された選出方法に基づき、柳川 堯, 吉村 功の両  
 氏が監事に選出された。

#### 4. IBSでのCouncil Member選挙について

IBSでのCouncil Member選挙にあたり、今後の国際学会での日本の発言力を高めるために日本人候補者を増やすこと、率先して投票を行うようにするよう努めること、国際会員を増やす努力をすることを理事会に提案することとした。

#### 5. 統計関連学会連合大会への参画について

統計関連学会連合大会への参画のあり方が討議され、問題点の改善等も含めて引き続き 2007 年度の新執行部に委ねることとした。なお、2008 年度への参画についての反対意見は出なかった。

#### 6. 評議員制度について

評議員制度が始まって今回で2期目を迎えたことから、問題点の改善や今後のあり方などについて2007年度の新執行部に検討を委ねることとした。

### 2006 年第 3 回対面理事会議事録

山岡和枝(庶務担当理事)

日時: 9月5日(火)18:00 - 19:30

場所: 川内北キャンパス講義棟 A103(大会会場 B 棟の隣 A 棟 1 階 103 番教室)

出席: 森川 上坂 大橋 松山 岸野 浜田 大瀧 岩崎 松浦 佐藤健 山岡 丹後

#### 議事

##### 1. 会報に関する報告

会報 91 号を発行したこと、次号を 11 月初旬に発行する予定であることが報告された。

##### 2. 選挙管理委員会からの報告

評議員選挙について、投票用紙を9月11日付けで発送する予定で現在準備を進めていることが報告された。

##### 3. 編集担当理事からの報告

9月現在での雑誌の編集状況および6学会連合の新たなジャーナルの発行については再検討することになったことが報告された。

##### 4. 2007 年統計関連学会連合大会の企画委員会委員、事務局、Web 委員の選出

2007 年統計関連学会連合大会の企画委員会委員として上坂理事を、事務局として高橋、寒水委員を、WEB 委員として高橋委員を、あと1年に限り、引き続き依頼することが承認された。

##### 5. 2006 年計量生物セミナーについて

計量生物セミナー実施案および記録集作成の方法ならびに財源について討議され、3つの話題を企画案に従って実施することが承認された。また、参加費等に関連して参加費が決定され、記録集を特集号として発行する際には学会一般会計から補助することが承認された。

##### 6. 計量生物学会シンポジウムについて

2007 年度の計量生物学会シンポジウムが 2007 年 5 月 24-26 日に東京で開催し、計量生物学会シンポジウムを 26 日(土)に、チュートリアルを 25 日(金)に行う予定であることが報告された。さらにシンポジウムおよびチュートリアルのテーマについて討議され、詳細について企画担当理事が検討することになった。

#### 7. IBS Council の投票について

IBS Council の選挙に関しては、次回より、できるだけ国内からの候補者に投票するよう、強制ではないが強く呼びかけるようにすることが承認された。

#### 8. First Conference of the Far East Asian Region of IBC 開催について

今後の IBC の立候補を進めていくうえでもアジアでの活動を活発にすることが重要であるという認識が確認され、標記 conference を開催する方向で韓国側との交渉を進めていくことが承認された。

#### 9. 日本統計学会 75 周年記念出版事業への協力依頼

標記出版事業への協力依頼についての経過報告があり、計量生物学会 25 周年記念出版として、検討していくことが承認された。

#### 10. 計量生物学会主催 特別講演会の開催について

Rosenberger 教授の特別講演会開催が提案され、今後開催の予定で進めていくことが承認された。また、今後さらにこのような形での特別講演会を開催し、学会活動を活発化していく一助にすることが確認された。

### 日本計量生物学会特別講演会のお知らせ

山岡和枝(庶務担当理事)

日本計量生物学会特別講演会「Randomization in Clinical Trials」を下記の要領で開催します。WEB での案内も合わせてご覧下さい。

<http://www.niph.go.jp/soshiki/gijutsu/sympo06/keiryouRosenberger.pdf> 本講演では、2002 年に「Outstanding Scientific and Professional Title, Mathematics and Statistics Division, Association of American Publishers」の賞をとられたテキスト「Randomization in Clinical Trials」の著者の一人である Rosenberger 教授 (George Mason University, USA) を講師にお招きし、最近の randomization に関する動向と新しい研究について紹介していただき討議を行います。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

日時: 2007 年 1 月 12 日(金)午後 3 時 30 分 ~ 5 時 00 分

場所: 東京大学大学院薬学系研究科・総合研究棟 2F 講堂 (文京区本郷 7-3-1)

司会: 丹後俊郎

主催: 日本計量生物学会

共催: 東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学講座

参加費: 無料

### 2007 年の計量生物シンポジウムに関するお知らせ

大橋靖雄・松浦正明・森川敏彦(企画担当理事)

来年の計量生物シンポジウムは 2007 年 5 月 25 日(金)、26 日(土)の両日、東京工業大学(大岡山キャンパス西 8 号館 E 棟: 大学院情報理工学系研究科大会議室)にて開催されます。

今回のテーマは「環境・医療・医薬におけるリスク評価と管理」です。特別セッションはシンポジウムと同タイトルで、筑波大・楢広計先生にオーガナイズをお願いし、数名の演者にご講演頂く予定です。またカナダから来日される Walter

教授の特別講演も予定しています。更には「疫学のデザインと統計的推測」に関するチュートリアルセミナーを京大・佐藤俊哉先生にお願いしました。奮ってご参加下さい。一般演題の発表に関しては、シンポジウムとしての性格から、企画サイドとして特にシンポジウムの趣旨に沿った演題のご発表を強く期待しております。奮ってご発表下さい。参加及び発表要領はあって学会ホームページ/ニュースレター等で会員の皆様にお知らせ致します。

## 1. 趣旨

いま温暖化、オゾン層破壊など地球規模で人類の生存を脅かす大きな環境変化が起きつつあります。また一方では、「ヒト」の個体レベルでの先端医療の目覚ましい発展の影で、投薬ミス等による思いもかけない副作用、手術失敗などの医療事故が頻繁に発生し、社会問題化しています。更には鳥インフルエンザウィルスなど、大量死亡を含む重篤な感染症の地球規模大発生が予想されています。そこで今回はそのような背景を踏まえ、これらのリスクの評価と管理の問題に対し、それぞれの分野で、生物統計家がどうアプローチし、どう問題解決を図れるかを議論したいと思います。リスク評価の対象は非常に広いので今回の対象を「環境・医療・医薬」に絞りました。このような問題はまさに生物統計家の活躍すべき舞台であるといえます。

## 2. プログラム

5月25日(金)午後:チュートリアルセミナー -  
「疫学のデザインと統計的推測」  
講師:佐藤俊哉(京大)

5月26日(土)終日:シンポジウム  
・特別セッション  
「環境・医療・医薬におけるリスク評価と管理」  
オーガナイザー:椿広計(筑波大)・森川敏彦(久留米大)  
座長:椿広計、演者:数名(未定)  
・特別講演  
演者:Prof. Walter (Canada, 演題未定)  
座長:柳川堯(久留米大)

## 2006 年度統計関連学会連合大会企画セッション「生物統計学の社会的貢献 - 四半世紀の経験と今後の展望」報告

上坂浩之(企画担当理事)

日本計量生物学会の 25 周年を記念して、丹後会長の発案により、統計関連学会連合大会で標記セッションを開催することとなった。このセッションでは、生物統計学の主要な領域で中心的な活動をされている方々に、本学会が生物統計学の発展に果たした役割を振り返るとともに、今後の発展の方向性を展望していただいた。会場は大会場であったにもかかわらず、満席に近い状態であり、本セッションへの関心の高さが窺われた。セッションは、柳川堯前会長の座長のもとに進められた。座長より、計量生物学における日本人の貢献を掘り起こすため、報告では触れられなかった日本人研究者の貢献を参加者から報告していただきたい旨の要望がなされ、いくつかの貢献がセッション参加者ならびに座長より追加された。丹後会長による基調講演では、計量生物学分野への日本人研究者の貢献の一側面についての結果が報告され、日本人研究者の国際的な場でのさらなる貢献へ

の期待が述べられた。また計量生物学会が計量生物学の発展にどのように寄与できるかという点についての問題提起と意見が出された。各領域の発展をたどり、今後の展望を語るには、1講演 30分(討論含む)はいささか短く、十分に語りきれない事柄が多くあったことは否めないであろう。なお各講演のより詳細な報告が、計量生物学誌の特集号として 2007 年に刊行される予定である。本セッションが今後の計量生物学の発展のひとつの契機になれば幸いである。

## 2006 年度統計関連学会連合大会チュートリアルセッション「adaptive and flexible designs in clinical trials」報告

上坂浩之(オーガナイザー・企画担当理事)

本チュートリアルセッションが扱った内容は、現在、医薬品の臨床試験に関する研究の中で最も盛んに議論されている話題である。医薬品の開発にかかる時間、資源および費用は増加の一途をたどっており、開発を促進させるためにも、より合理的な試験方法の開発が望まれている。この状況を反映して欧米では、adaptive and flexible design について、産官学での研究会が盛んに催されている。日本では、残念ながらこの領域の研究は格段に遅れている。セミナーでは、アメリカの Vanderbilt 大学でこのテーマで研究されている小山達樹博士に adaptive and flexible design の理論についての講義をしていただいた。Adaptive and flexible design では、試験の中間結果を利用して、その後に組み入れられる被験者のデータの解析における仮説の変更、一部の試験治療群の除外、解析する変数の変更、被験者数の変更などを計画する。ここで問題になることは、試験の中間結果に基づくこれらの変更によっても、第1種の過誤確率の増大をきたすことなく、できるだけ少ない被験者数で検出力あるいは精度を確保する方式を見出すことと、それに伴う推測理論の確立である。また試験の実施ならびに評価に関しては、中間解析以後のデザインの変更によりもたらされる可能性のあるバイアスを抑制することである。このチュートリアルセッションでは、2 薬剤の比較試験について、統計的推測とデザインの設計に関する理論を解説していただいた。講義では、基本的な考えから最新の理論と、試験デザインの決定の方法を、例題を用いてわかりやすく解説していただいた。実施上の問題については、翌々日に行われた企画セッション「臨床試験における adaptive design の活用」にて議論された。このチュートリアルセミナーは企画セッションの参加者にとっても、design の理論的側面の理解に役立ったことであろう。このセミナーならびに企画セッションを契機として、多くの方々に adaptive and flexible design に関心を持っていただき、この分野の研究の発展とデザインの活用が促進されることを願っています。

## 2006年度統計関連学会連合大会コンペティション講演受賞者の弁

矢島美寛(2006年度統計関連学会連合大会企画委員会委員長)

## 最優秀賞受賞者

川口修治(九州大学大学院数理学府)

はじめに、コンペティションの企画運営に携わった関係者の方々並びに私の講演の審査をしていただいた方々にこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。この度、コンペ

ティションにおいて栄誉ある最優秀報告賞を頂き大変うれしく、身に余る光栄です。また様々なコメント、協力、励ましを頂いた皆様には厚く御礼申し上げます。

近年取得されるデータの高次元化に伴い、様々な判別・特徴抽出手法が提案されています。とりわけ Boosting は、シンプルな弱判別機を結合することで、複雑な判別問題に適用できる利点から、現在多くの分野において盛んに用いられています。AdaBoost は弱学習機を適切に選択することで、より高精度な判別結果が得られます。本研究では変数の線形結合やカーネルで作られる2群判別機(スタンプ)をランダムに生成し(ランダムスタンプ)、弱判別機とすることで柔軟な判別機を生成することを可能としました。次にランダムスタンプによる AdaBoost の精度向上・安定化を図るため、教師データのランダムな分割及びテストリスクを用いた AdaBoost を提案しました。提案した手法は、シミュレーションデータのみならず、高次元の人工衛星観測画像の判別・特徴選択に対して有効な結果を示しました。特に、この結果がリモートセンシング関係の国際ジャーナル誌の結果を上回れたことが大きな成果です。今後は、本手法を他分野に適用することを目的としております。

修士課程では(現在においても)、主にリモートセンシング分野を研究発表の場としておりましたので、このような統計関連の大会での発表は今回が初めてでした。そのため、いままでの発表スタイルがこの場においても活かせるのかと萎縮していました。しかし、分野が違っても発表における基本的なポイントは同じであることを真に感じました。スライドは手法を明瞭に説明し、結果を重点に説明することに尽力しました。

今後もこの賞を励みに、統計的方法論による手法が様々な応用分野における目覚ましい成果に結びつくよう、愚公移山の精神で日々研究に取り組む所存です。最後に改めまして、素晴らしい賞を頂き、本当にありがとうございました。

## 優秀賞受賞者

西山貴弘(東京理科大学大学院理学研究科)

この度の統計関連学会連合大会コンペティションにおいて、優秀報告賞を頂き大変光栄に思っています。日頃からご指導頂いております瀬尾隆先生をはじめ、お世話になっているすべての方々に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

今回の発表では、正規母集団の下で平均ベクトル間の多重対比較法を行う手法である、多変量 Tukey-Kramer 法について議論し、その重要な性質である多変量一般化 Tukey 予想を母集団数が4つの場合について証明しました。さらに、この場合の保守性の上限を与え、数値実験により保守性の程度を評価しました。多変量一般化 Tukey 予想は、「多変量 Tukey-Kramer 法は常に保守的な同時信頼区間を構成する」という予想ですが、今まで母集団数が3つの場合でしか証明されていませんでした。今回、母集団数が4つの場合について証明できたことは非常に意義があることだと思われます。また、保守性の程度を把握することは、多変量 Tukey-Kramer 法を実際に用いる際に役立つ情報として参考になるでしょう。

今回のコンペティション講演を通じて非常に貴重な経験が得られました。コンペティション講演として相応しい発表をすると同時に、聴衆の方々に理解しやすい発表をするために、スライドの作成や表現方法の工夫に自分なりの努力をしてみました。このような様々な努力を優秀報告賞として評価して頂き大変うれしく思っています。

最後になりますが、このような貴重なコンペティション講演を企画・運営していただいた関係者の方々、貴重なコメント・質問を下さいましたの方々、審査に参加いただいた方々に改めて心から感謝申し上げます。今後もこの受賞を励みとし

て、一層の努力を重ね、統計学の発展に少しでも貢献できればと考えていますので、今後どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 優秀賞受賞者

西浦博(長崎大学熱帯医学研究所/  
チュービンゲン大学医学系計量生物研究所)

このたびは、統計関連学会連合大会優秀報告賞をいただきまして、ありがとうございました。自分が最も面白いと感じる応用的研究を統計学専門の先生方に評価していただけたことは大変嬉しいですし、私にとって非常に大きな自信に繋がりました。感染症数理の恩師である広島大学の梯正之先生、英国の理論疫学指導者 Roy Anderson 先生、ドイツの数理疫学指導者 Klaus Dietz 先生と共同研究者 Martin Eichner 先生をはじめ、日頃よりご指導いただきお世話になっている全ての方々にこの機会を借りて深謝致します。

本報告では、天然痘の歴史統計を利用してワクチン免疫の持続期間推定を行いました。これまでに収集した約9千編の天然痘流行記録の中から、ワクチン再接種や暴露後ワクチン接種が実施されていない下での流行データであることを絶対的な選定条件として、1900年前後の英国における年齢階級別・ワクチン接種歴別の感染者数を選択・利用しました。ワクチン接種歴別で見た感染者の年齢分布に見られる特異的免疫喪失パターンを定量化するために、2変量ポアソン計数データモデルを用いることによって免疫消失関数を与えるパラメータの最尤推定値を得ました。免疫持続期間の中央値は11.7 - 28.4年の範囲で推定され、天然痘根絶前に予防接種を受けた者は既に免疫を失った可能性が高いと考えられました。しかし、重症天然痘を回避する部分効果を別途で推定したところ、ワクチン接種後50年以上が経過しても50%以上の接種者は未だに部分免疫を保持している可能性が高いと期待されました。

私は医学部を卒業したために、医学教育の中で短期的に教わる基礎的内容を除けば詳しい統計教育を経験したことがありません。そのため、統計学領域の学会や研究会で発表する機会を与えていただいた際は、自分の推定モデルにおける技術的欠陥や妥当性に問題がある可能性について常に不安を感じています。しかし、感染症疫学データは様々な点で特異性が高いために余りにも面白く、同分野に应用的手法を提案する作業は私の研究における必須条件であると考えています。そのため、敢えて批判を浴びる目的で統計学領域の学会に演題を提出することを自身の勉強の機会にさせていただいています。特に、数理統計学の専門的研究が多い同大会で勉強できる機会には私にとって大変貴重な経験でした。自身が応用することの多い手法と余り関連が深い内容は未だフォローすることさえ難しいのですが、何を学べば良いかを明らかにできましたし、何よりも非常に刺激的で有意義な時間を過ごすことができました。私は日本計量生物学会の会員ですので、同学会はもちろん連合大会を含めて今後も統計学領域の学会に参加させていただく予定です。応用的研究の内容を深く幅広くすることを心掛け、将来には学会発展にも貢献できる研究ができるよう努力して参ります。ぜひ、今後ともご指導いただけますよう宜しくお願い申し上げます。

## 優秀賞受賞者

堂園剛司(九州大学大学院数理学府)

統計関連学会連合大会コンペティションセッションにおいて優秀報告賞を受賞させていただき、大変光栄にそして嬉しく思っております。まずコンペティションセッションの企画・



## 会員からのお知らせ: 科研費シンポジウム 「Adaptive Design を考える」

成蹊大学理工学部 岩崎 学

以下の要領で標記シンポジウムを開催します。参加資格はありません。このテーマに興味をお持ちの方であればどなたでも歓迎ですので、奮ってご参加ください。

期 日: 2007年1月19日(金) 13:00~17:00

会 場: 新宿住友ビル B1F 住友ホール(東京都新宿区西新宿 2-6-1) <http://www.ssbk.net/>

主 催: 科学研究費補助金基盤研究 (A) No. 16200022「医薬品の有効性・安全性の統計的評価法の新展開」(研究代表者: 岩崎 学)

参加費・資料代: 無料

参加申込: 科研費のホームページ <http://www.kakenbio.com/> から「氏名」、「所属」、「メールアドレス」と共にお申込ください。

照会先: 岩崎 学 (成蹊大学) iwasaki@st.seikei.ac.jp

### プログラム(予定)

- 13:00 - 13:10 挨拶 岩崎 学(成蹊大学)
- 13:10 - 13:35 臨床試験における Adaptive Designs の概要  
飯森 孝行(杏林製薬) / 製薬協 統計・DM 部会 TF2
- 13:35 - 14:05 Adaptive Design に関する一考察  
伊藤 隆洋(協和発酵)
- 14:05 - 14:30 中間評価で観察された群間差に基づく症例  
数再設計方法  
上村 鋼平(東京大学)
- 14:30 - 15:00 Adaptive Design は有益か?  
小山 暢之(三共)
- 15:00 - 15:10 休憩
- 15:10 - 15:45 臨床試験における Adaptive Designs の留意点  
吉村 功(東京理科大学)
- 15:45 - 16:20 吉村コメントに対する考察  
森田 智視(名古屋大学)
- 16:20 - 16:40 指定討論  
舟喜 光一(持田製薬)  
折笠 秀樹(富山大学)
- 16:40 - 17:00 総合討論
- 17:00 終了

### 編集後記

師走の季節を迎えます。この時期になると例年、たくさん  
の古書目録が編集子の自宅に送られてきます。各古書店  
の目録には、書痴の僅かなボーナスを狙って、美麗で高価  
な書籍がずらりと並んでいます。最近では、近代文学初版  
本よりも探偵・推理小説や手塚治虫の漫画の初版本などの  
方が人気があるようです。例えば、夢野久作の「ドグラ・マグラ」(松柏館書店、昭和10年刊)などは初版・函付きで70~80万円もします。物語は九州帝国大学医学部を舞台に展開しますが、主人公の名前(呉一郎)は物語の背景設定からも明らかに呉秀三(東京帝国大学教授:日本の精神医学の祖)をモデルにしていると思われます。呉秀三といえば、Österlenの著書を翻訳し、帝国医科大学在学中の明治22年に「醫學統計論」として出版していますが、そこにドイツ留学から帰国したばかりの鷗外・森林太郎が序文を寄せています。

先日、編集子が某大学の講義で統計学の歴史に触れた際にこの序文のコピーを配布しました。それを手にした一人の学生曰く、「先生、この【しんりん・たろう】って誰ですか?」一瞬、冗談かと思いましたが、あまりにも真面目に質問するのでそうでないことは明らかでした。受験に必要なことからという理由での「世界史」の単位未履修の問題が取り沙汰され、一方で学習指導要領の「ゆとり教育」の失敗が指弾されています。受験に関係ない教科を削ったり、学習時間を短縮したりするのは本末転倒で、むしろ歴史や文学、芸術などを教え、学ぶことこそが人としての厚みを増す、本来の心の「ゆとり」教育なのではないのかなと思考する次第です。受験戦争を勝ち抜いた戦士の一言に、活字を愛する者として、木枯らしのせいだけではなく、心の中にもひんやり寂しい風が吹いたような気持ちになりました。

次号は梅花のほころぶ時季に発行予定です。

日本橋の河岸より

計量生物学会ニューズレター92号  
2006年11月30日発行  
発行者 日本計量生物学会  
発行責任者 丹後 俊郎  
編集者 佐藤健一、酒井弘憲